

## 主 題：原点に立ち返る

## 聖書箇所：使徒の働き 2章42節

きょう、本来なら私たちが普段学んでいるコリント人への手紙を語るはずですが、今回もさまざまな教会を訪問し、さまざまな牧師たちと話をし、どうしてもこの話をしなければならないと思いました。教会についてです。聖霊が下るといふペンテコステの出来事以降、地上に教会が誕生しました。神様が教会を通してみわざをなされることは神のご計画でした。確かに初代教会はキリストの栄光を現し、その役割を十分に果たしてきた。問題なのは私たちの教会です。今の私たちの教会が初代教会のように神様の栄光を現し、与えられた責任をしっかりと果たしているのかどうか。私たちの教会を神様は喜んでくださっているのかどうかです。そして教会というと建物を指しているではありません。そこに集うあなたの話です。あなたは神に喜ばれる存在なのかどうかです。私たちが今したいことは、もう一回原点に立ち返ることです。神様がどんな教会を喜ばれるのか、どんな教会を願っておられるのかをまず見る必要があります。

## ★ 神に喜ばれる群れ

そこできょう私たちが選んだ聖書の箇所は、使徒2：42「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」です。ここに初代教会の四つの特徴を見ることができます。これらのことを通して、本当に神様が望んでおられる教会がどういう教会なのか、どういう集まりなのかを見ていきます。そこにどういう信者が集い、どういう群れを形成しているのかです。きょう私たちはこの四つの特徴から具体的に11の項目を見ていきます。それを通して、神が喜ばれる教会とはどういう教会なのかをいま一度思い出したいと思えます。なぜそんなことをするかというと、我々が自分を吟味するためにです。主が望んでおられる教会がどんなものかを今から一緒に見ていきます。

日本語には出てこないのですが、実は原語では42節は「である」という動詞で始まるのです。しかもこの動詞の時制は未完形を使っています。なぜそんな時制を使ったのかというと、ヒントはその前41節にあります。聖霊が下ったペンテコステの時に、人々の前でペテロがイエス・キリストによる救いのメッセージ、キリストの福音を語り、41節「三千人ほどが弟子に加えられた。」とあります。つまり約「三千人」の人々がイエス・キリストの救いにあずかったのです。そしてその救いにあずかった時から、彼らがどんなふうに進んでいるのかを教えるために、あえてここに未完形の動詞を使ったのです。つまり過去に起こったことがどのように現在も継続しているのかをルカは教えたかったのです。これから私たちが見ていくことは、個人として教会として私たちがしっかりと模範としなければならないことです。こういう個人が、こういう教会が神がお喜びになる教会であり、個人だということです。しっかりとそれを見て、我々自身、みずからを吟味したいと思えます。どうか「主よ、私を変えてください」という祈りをもって、このみことばを一緒に見ていただきたいと思えます。

## 特徴1：「使徒たちの教えを堅く守り」

まず最初42節に、この「三千人」が「彼らは使徒たちの教えを堅く守り」とあります。

## ① 主に対して従順な群れだった：使徒1：14、申命記10：12、13：4

この人々は主に対して忠実な、従順な群れであったということです。この「堅く守る」というのは「揺るがないで忍耐強く続ける」とか「それに専念する」、また「あることから離れない」という意味を持ったことばが使われています。ですからここで言っていることは、彼らは使徒たちから受けた教えから離れなかった、その教えに継続して従い続けていたということです。ですから「堅く守り」という動詞を現在形で使っています。まさに彼らが救われた時からそういう歩みをしていたということです。

ですから、この初代教会で救いにあずかったクリスチャンたちは、その後継続して神様のおことばをしっかりと守って、その教えに従っていた。これは本当に救われている人の特徴です。繰り返します。本当に救われている人々というのは神の教えに従い続けていくのです。この人は失敗を犯さないという話ではない。本当に救われていても悲しいことに同じような罪を繰り返します。信仰的にダウンして救いを疑ってみたり、真理を疑うようなことを経験するかもしれない。でも特徴として、救われた人たちは神の教えを守り続け、それに従い続けていこうとするということです。

## ◎ “信じる者”は“聞き従う者”

今、クリスチャンというのは神の教えに聞き従う者たちであると言いました。ヨハネ3：36のみことばには、“信じること”と“従うこと”が同義語で書かれてあります。“信じる”と言ったらこの救いにあずかることです。そして“神に聞き従う”ということもまさに同じことを言っているということ

をみことばが教えるのです。ヨハネ3：36にはこうあります。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、」、イエス様を信じた人は永遠のいのちを持つと書いてあります。続けて「御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」、イエス様を信じる人と信じない人を対比させているのです。ところが、ここで「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子を信じない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と書いてもよかったです。あえてそう書かなかったのです。あえてイエス様に「聞き従わない者」という同義語を使ったのです。同じことを言っているからです。

ルカは使徒5：32でも「神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」と言います。聖霊をいただくということは救いにあずかるということです。神の救いにあずかった人々は救われたことの証拠として聖霊をいただきます。聖霊がその人のうちに内住するのです。それが救いです。ルカは使徒5章の中で、神がご自分に従う者たちに聖霊をお与えになると言っています。また2テサロニケ1：8にも「神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」、この神の救いを拒む者たちです。主イエス・キリストの福音に従わない、主イエス・キリストの福音を信じない者には必ずそれにふさわしい報い、さばきが来ますとパウロは教えます。ヘブル5：9にも「彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、」と言っています。1ペテロ4：17にも「神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。」とあります。ですからみことばは繰り返し“信じる”ということと“神に聞き従う”ということと同義語として使っています。ですからイエス様を信じるということは、イエス様を私の神として、私の救い主として、私の主人としてこの方に従っていくということと全く同じ意味があるのです。

### ◎ 御霊に満たされている証拠：エペソ5：21～、コロサイ3：18～

ですからこの初代教会のクリスチャンたちは、使徒たちの教えを堅く守り、その教えにとどまり続け、それを実践しようとしていた。それはまさに彼らがこの救いにあずかり、神のことばに聞き従おうとしていたということです。このキリストに従っていくということは救われた人たちの特徴だと言いました。救いにあずかった人たちも同じようにキリストに従っていくのです。これは確かに我々が救われているというだけではなくて、いただいた聖霊が私たちを支配することによって喜んでこの方に従っていくという思いを持ち、そうやって生きて行くのです。

エペソ5：21やコロサイ3：18から聖霊に満たされた人たちの特徴が教えられています。聖霊なる神様が与えられただけではない、聖霊なる神様がその人たちを支配しているならば、次のような特徴があると言うのです。その人は喜びにあふれているし、感謝に満たされている。そして三つ目の特徴は彼らは従う者たちなのだと、“従うこと”が記されています。ですから従順というのはその人が救いにあずかっているだけではない。聖霊なる神様に支配されていることをも表すのです。なぜならイエス様を信じて聖霊をいただいているながら、不従順な信仰者もいるのです。

余談になりますが、不従順な信仰者の特徴というのは先ほど見たものを持っていないことです。例えばそこには喜びではなくていつも不満があるかもしれない。感謝ではなくて愚痴ばかり言っているかもしれない。喜んで主に従っていくというよりは自分の考えに従っていくとするかもしれない。ですから聖霊なる神がすべてを支配されることによって、聖霊なる神をいただいた者たちにもそういった歩みが生まれてくるのです。ですから聖霊に満たされているクリスチャンたちというのは、喜んで神に従おうとするし、同時にリーダーに従おうとするのです。例えば家庭において、夫婦においては神が立てられた霊的リーダーである夫に従っていくとします。親子関係においては子どもたちは立てられた親に従っていくとします。また教会において教会員はその教会のリーダーに従っていくとします。社会において我々国民は、その社会のリーダーに従っていくとします。「人はみな、上に立つ權威に従うべきです。神によらない權威はなく、存在している權威はすべて、神によって立てられたものです。」（ローマ13：1）、私たちの理想とするようなリーダーでないにしても、神が立てられたリーダーゆえに私たちはそれに従っていくのです。もちろん神のみことばに反することを命じられた場合は別です。

### ② みことばが教えられている群れだった

彼らが神様のみことばに従っているということは、みことばが語られている教会でもあったということです。みことばが語られていたからその語られたみことばに人々は従おうとしたのです。確かに教会が建て上げられていく時に、その過程はエペソ4章の中に出ていますが、「キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになった」と11節が教えます。そうやって教会の土台が築かれていったのです。十二使徒たちがいたのです。そして預言者、伝道者、牧師、教師たちがいるのです。この働き人たちの責任は神のみことばを教えることだとみことばは我々に教えます。でも悲しいことにそれがおろそかになってしまっていると言うのです。教会によって

は牧師がみことばを教えることよりもほかの雑務に負われるような責任を与えているかもしれない。一番大切なのは神のみことばをしっかりと教えることです。それによって人々は養われていくのです。

悲しいことに今、教会が大きく変わってきています。日本だけにいるとなかなか私たちはそういうことに気づかないのですが、海外に行くと、いろいろなセミナーの様子を聞いてみると、まさかそんなことは日本で起こってないでしょうと思うような事案もあります。今アメリカの教会が抱えているいろいろな問題、よく考えてみたらもうそういうのが日本に入ってきています。我々が気づかなかっただけです。どんなふうになっていくかという、2テモテ4：3が教えるように、人々は健全な教えに耳を貸そうとしなくなっていくということです。つまり教会は神様のことばを欲して集まるはずなのに、教会は神のことばを要求しないということです。なぜなら神様のおことばは厳しいからです。神のおことばは私たちに神に逆らう者たちがどこで永遠を過ごすのか教えています。みことばは私たちに永遠のさばきがあること、永遠の地獄があることを教えるのです。そうすると多くの会衆たちはそんな話は聞きたくない。彼らが聞きたいのは天国の話やどうしたらもっとハッピーになれるかということです。1週間辛い生活を送ってきて、日曜日ぐらいそういう話を聞かせてほしいと。ですからそういうメッセージをする人たちがふえていくのです。それはもうパウロが2テモテ4：3-4で「人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」と教えたとおりです。そんな時代になっていると皆さんお気づきになりませんか？

お話ししたかもしれませんが、日本の著名な神学校の牧師がクリスチャン新聞に「講解説教は日本のキリスト教会をだめにする」と書かれました。講解説教というのは私たちがしていることです。1節ずつみことばを見て神が何を言われているかを解き明かしていくのです。講解説教に戻らないから、日本のキリスト教会はだめなのです。皆さんここに来て、私の個人的な話なんてどうでもいいことでしょうか？私がどう思うとかどう感じるとか、そのために集まるのならむだな時間です。皆さんが集まっておられるのは神のことばを聞きたいからです。神が何を言っておられるかです。これが神が言われるメッセージだと、私たちはそれを聞くために集まって来ているのです。でも教会はそういうものを拒絶し始める、もうそれは既に起こっています。今確かに私たちは終わりの時代に生きているのです。教会は神様がお建てになった働き人たちがそこでしっかりみことばを語ることによって、人々が養われて成長し、みずからの賜物を生かして働きをなしていく場所です。エペソ4：12が言うように「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため」だと。みことばが言っていることは明確です。みことばによって人々は成長し、ひとりひとりが成長することによって全体が成長していくと。

#### a. みことばを学ぶ：使徒17：11、テトス1：9

だからあなたの責任はまずしっかりとみことばを学ぶことです。ただ、語られている聖書のみことば、本かもしれない、だれかのメッセージかもしれない、さまざまな形で我々はみことばと称するものに触れます。みことばを学ぶ時に私たちが注意しなければいけないことは、それが本当に神が言われていることなのか、聖書の教えかどうかをしっかりと吟味することです。それを見極める霊的な判断力が必要なのです。それがベレヤという町のクリスチャンたちの歩みでした。ヨーロッパへの宣教を始めたパウロたちは、ピリピからテサロニケに移動し、テサロニケでユダヤ人たちの迫害を受けてベレヤへと移動します。このベレヤのクリスチャンたちは使徒17：11「テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」とあります。ベレヤのクリスチャンたちはテサロニケのクリスチャンたちよりも「良い人」だと言うのです。これは立派な心がけの人ということです。彼らはあることをしっかりと決心していたのです。彼らはただ熱心にみことばを聞いただけではない。その聞いたみことばが本当に聖書が教えている真理なのかどうかを彼らはみことばをもって吟味したのです。皆さんがメッセージを聞いて本当にしなければいけないことは、それが聖書の教えていることを語っているのかどうか、しっかりと吟味することです。まずそうして私たちは神様のことばをしっかりと正しく学ぶことが必要です。

#### b. みことばの実践：

そして学んだことをしっかりと実践することです。繰り返しますが、それがなければ絶対に成長はないです。どんなにみことばを聞いて、どんなに詳しいノートを書いても、それだけでは絶対信仰は成長しない、あなたは変わりません、断言できます。ではどうしたらいいのか——。聞いたみことばを毎日の生活に生かすのです。でなければあなたは変わってこないのです。それが神様の望んでおられることなのです。我々が地上にいてイエス様がどんなお方であるかを人々の前に証しするのです。そのためには私たちが何を語るかではない、どのような信仰者に変えられているかが問題なのです。でも私たちの大変弱いところは、みことばを学ぶことには熱心でも、みことばを学んでその学んだ神様の真理を

日々の生活に生かさないから、いつまでたっても変わってこないのです。もう何十回、何百回、これからも言うかもしれない。それが成長の秘訣です。

### c. 奉仕に励む：

そして三つ目は、みことばを学ぶだけではない、実践するだけではない、働くこと、奉仕することです。私たちは何もしないでじっとしているのではないのです。我々は主によって救われた者として、神様が与えてくださった賜物を用いて働くことによって成長するし、先ほども見たように群れ全体も成長して行くのです。

### 特徴2：「交わりをしていた」

二つ目の特徴は42節「交わりをし」ていたとあります。この「交わり」ということばは“コイノニア”というギリシャ語が使われています。ただみんなが集まってきのう見たテレビが楽しかったねとわいわい話をする、それは聖書の言っている“コイノニア”ではないのです。それはただの社交場です。そんなのに時間を費やしても我々の信仰は成長しません。ではこの初代教会の交わりというのは具体的にどんなことをしていたのか、みことばは我々にこんなことを教えてくれます。

### ③ 励まし合う群れだった：1テサロニケ5：11、14

彼らが集まった時には常に励まし合う群れであったということです。何を励ましていたかということ、主の前を正しく歩んでいこう、神が喜ばれることを選択していこうと励ますのです。パウロがテサロニケに送った手紙、1テサロニケ5：11に「あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」とあります。また同じ1テサロニケ5：14では「**小心な者を励ま**」せとあります。この「小心」ということばは「落胆した」人たち、落ち込んでいる人たちです。こういう人たちを励ましていきなさいと。教会の中にもそういう人がいるかもしれない。いろいろなことがあって落ち込んでいるかもしれない。辛いことがあって落ち込んでいるかもしれない。いろいろなことで苦しんで落ち込んでいるかもしれない。この初代教会はそういう人々を励ます。そしてしっかりその目を神の方に向けるように励まし合っていたのです。

### ④ 助け合う群れだった：1テサロニケ5：14、1テモテ5：10、1テモテ5：16

四つ目は、この交わりを持っていた教会は助け合う群れであったということです。同じ1テサロニケ5：14の中に「**弱い者を助け**」ということばが出てきます。また1テモテ5：10には「**困っている人を助け**」るとあります。また同じように1テモテ5：16には「**やもめを助け**」なさいとも書かれています。いろいろな問題を抱えている人々、つまり困っている人たち、必要がある人々を助けてあげなさいと。この教会の群れは、すべての目を自分ではなく人々に向けているのです。励まし合っていくためには人々の様子を見ていなければいけない。そういう人がおられたら一緒に祈ろう。またいろいろな必要を抱えている人がいるならば、その必要に何とかこたえようとする。少なくとも私たちはその必要を一緒になって神の前に持っていくことができる。弱い人々を、身寄りのないやもめたちを私たちは見捨ててはならない。そういう人々を助けなさいと。

### ⑤ 戒め合う（注意）群れだった：

また、その交わりは戒め合う、注意し合う交わりです。私たちがともに集まった時に、神の前を正しく歩んでいくように勧めるのだけれども、そういう歩みをしていない人たちに対してはその歩みは間違っているということを伝える、それも愛です。なぜならみこころに逆らって生きる生き方は、その人が祝福を逃しているのです。神様の祝福をいただきながら生きるためにはみこころに従っていく、神が喜ばれることをしていけばいいのです。でも残念ながら私たちには肉を持っているために、罪を持っているために自分の思いどおりに生きていきたいという誘惑があるのです。そこには神様の祝福はない。ですからみこころから外れてしまって、自分の思いどおりに歩んでいる人がいるならば、私たちは愛するゆえに兄弟、それは間違っていると教えなければいけない。

パウロは使徒20：31でこう言っています。「私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」と。パウロがエペソに行った時に3年間訓戒し続けたと。この「訓戒し続けて来た」と訳されている動詞は現在形です。1回、2回ではない。そのように訓戒し続けたと。パウロは1コリント5：12-13でも「**外部の人たちをさばくことは、私のすべきこと**でしょうか。あなたがたがさばくべき者は、**内部の人たちではありませんか。外部の人たちは、神がおさばき**になります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」と言います。つまり私たちの集まりの中の神に逆らい続ける兄弟姉妹に、愛するゆえにそのあなたの歩みは間違っていると伝え、悔い改めるように言ってもそれを悔い改めなければそれをどうするか、みことばが教えるように私たちは何人かの証人をもって悔い改めるように言い、それでも悔い改めなければ愛するゆえに今までの交わりからその人物を断つのです。それは罰を与えているのではない。今まで持っていた楽しい交わりを失うことを通して、悔い改めに至るきっかけとなることを願ってです。ですからパウロのみことばを見る時に、兄弟姉妹が

集まる交わりの中には兄弟姉妹が互いに罪を注意し合う、戒め合う、そういうことがなされていたのです。私たちの群れもそうです。お互いを愛するゆえにお互いが本当に神の祝福をいただいて地上の生活を全うするために、間違っていることがあれば伝えなければいけない。そういう交わりであったことを見ることができます。

#### ⑥ 仕え合う群れだった：1ペテロ4：10、ガラテヤ5：13

六つ目は、その群れは仕え合う群れであったということです。“コイノニア”という交わりの話をする時に、我々が言えるのは、その集まりの中に必ずあったことはお互いがお互いを覚えて、そして仕え合うということでした。ペテロは1ペテロ4：10に「それぞれが賜物を受けているのですから、……その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」と言っています。ガラテヤ5：13でパウロも「愛をもって互いに仕えなさい。」と言っています。

ということは、私たちは周りの兄弟姉妹たちが私のために何をしてくれるかを期待しているのではなくて、周りの兄弟姉妹のために何をしようかと考えています。この人たちがますます神を愛する者として成長するために、神の前に正しく生きていくために何をしたらいいのだろうと。少なくとも我々は祈れるし、励ますこともできる。まさにこの群れはこうして仕え合う群れでした。この群れは確実に誰が一番か、誰が霊的でそうでないか、そんなことを競っている群れではなかった。

#### ⑦ 愛し合う群れだった：

そして7番目は、この群れは愛し合う群れだということです。

##### a. 自分の兄弟の悪口を言わない、自分の兄弟をさばかない ヤコブ4：11、12

“愛し合う”というのは非常に漠然としていますが、まず愛しているから兄弟の悪口を絶対言わない。愛している人の悪口を言わないでしょう？悪口はそうでない人のことを言うのです。私たちが群れのひとりひとりを愛しているなら私たちはその人の悪口を決して言わないし、兄弟をさばくこともしないのです。ヤコブはこう言います。「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。」（ヤコブ4：11）と。みことばがそのことを禁止しているのです。我々が決めなければいけないのは私の口から愛する兄弟姉妹たちの悪口が絶対出はならないと。

##### b. 主の愛を模範にして愛し合う 1ヨハネ4：11

二つ目に私たちの歩みにおいて我々が模範とすべきなのはイエス様自身の愛です。イエス様がどういうふうにならぬかを愛してくださったのか、それが私たちの模範です。「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」、1ヨハネ4：11です。私たちに必要なのはイエス様の愛を見て、その愛にならって歩んでいくことです。私たちの実践してきた愛というのは必ず条件がついていたのです。でも神があなたや私に示してくださった愛というのは無条件にみずから進んで愛し続ける愛でした。そのような愛を模範として歩んでいきなさいと。

##### c. 主の愛で愛し合う 1ヨハネ4：19

そうすると、私たちはイエス様が愛してくださったような愛で人を愛することは私には無理だと思います。感謝なことのみことばはちゃんと答えをくれている。同じ1ヨハネ4：19に「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」とあります。愛し合うことができるのは、その神の愛が私たちに与えられているからだ。生まれつきの愛で神の愛を実践することは不可能なのです。でもみことばはそれができると言うのです。なぜかというと、私たちに今はもう既に神の愛が与えられているからです。与えられた愛をもってその愛の実践ができるのだと言っているのです。だから私たちに必要なことは、今見てきたように、まず私たちが例えば誰かに対して悪口を言いたくなくても、神に助けを求めて、それが正しくないゆえにしないのです。だれかをさばこうと思ってもそれをしないのです。正しくないし、それは愛ではないからです。主よ、あなたはこんなどうしようもない私をこのような愛で愛してくださり、救いを備えてくださり、そして一番必要な罪の赦しを与えてくださった。自分がどんな愛でもってイエス様に愛されているのかを見た時に、私たちも人々の最善のために尽くしていこうとするのです。そして感謝ことにそれが実践できるようにと神の愛がもう我々に与えられている。だったらどうか神様、あなたに対する愛だけではない、周りにいる兄弟姉妹たちに対しても同じ愛をもって接することができるように助けてください。神に助けをもらわない限り、愛の実践は不可能です。でも私たちのうちにもう既に神の愛が与えられているから、それができるのだとみことばは教えます。

##### d. 兄弟を憎まない 1ヨハネ4：20、21

私たちは兄弟を憎まないことも覚えなければいけない。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるならその人は偽り者だと。誰かに対する憎しみがありません？この人はいいけど、どうしてもこの人は愛せない。どうしてもこの人のことが憎くて。それは愛ではなく罪です。それを神の前に告白して神の助けをいただきながら愛することができるようにすることです。

## e. 赦し合う エペソ4：32、コロサイ3：13

もう一つ言えることは赦し合うことです。愛し合う群れというのは、赦された者としてお互い赦し合っていくのです。「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦して下さったように、互いに赦し合いなさい。」、エペソ4：32です。またコロサイ3：13の「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦して下さったように、あなたがたもそうしなさい。」と。

以上、見て来たことはどれも私たちにとってはハードルが高いです。でも神様はそれが可能だと言われます。すべての鍵は神の助けによってできるということです。それを私たちは別のことばで“恵み”と呼んでいます。日々の信仰生活において神の恵みをいただきながら、神様が望んでおられることを私たちはなしていくことができる。そしてそのすべての歩みの称賛の矛先は自分たちではなくて、それを可能にしてくれた神の方に行くのです。

先ほども少し触れましたが、私たちが愛を实践し合う群れとして歩いていくためにもう一つ覚えておいていただきたいのは、我々自身がへりくだることです。というのは人を愛せない一番大きな問題は、もちろん罪と言ってしまえばそれまでなのですが、我々自身のプライドです。なぜなら皆さんにだれかが何かを言った時に、我々が腹を立てるのはその意見が正しくないと思うからです。あなたに言われる筋合いはないわ、こんな大好きな私のことをそんなこと言うなんて、そんなあなたのこと私はもう大嫌い。結局自分が傷ついたと言うのです。つまり我々はプライドが高過ぎるのです。「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」、その生き方と全く違うことを聖書は教えます。兄弟愛をもって互いに愛し合うことができるのです。でもそのためにはその相手を尊敬をもって自分よりまさっていると思えとローマ12：10が言いました。ピリピ2：3にも「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」とあります。みことばは私たちにちゃんと鍵を教えてくれているのです。

こうしたらいいのです。人が私をどう思うかにいつも注意を払ってきた私たちが、主が私をどう思うかを考えるのです。神様が私をどうお思いになるのかです。私たちの評価は最終的に神から届きます。人からどんな評価をもらったとしても、それはこの地上的な話です。私たちが望んでいるのは神からの評価です。神が何と云ってくださるかです。日々の生活において私の歩みを神がごらんになっている、その神がどう思うかです。我々自身の目を人々ではなく、自分ではなく、神に向けることです。この方に対して私たちは責任を持っているのです。確かにみことばの言うことと私たちのうちにある肉はいつも闘っています。みことばが言うとおりにしたくないのです。自分たちの思うように生きていきたいのです。でも我々はもうわかっているように、そのような歩みに神の祝福はないし、間違った歩みをすれば、神は私たちから喜びを除いていたり、感謝を除いていかれることによって私たちは間違っているということを明らかにして下さいます。皆さんも人生で1回ぐらい間違った歩みをしたことがあると思います。その時に経験したことは空しい生き方です。どんなに喜びを持っているように振舞ったとしても、正直に自分の心を見た時に、その歩みに神の祝福がないことはわかっています。神の祝福をいただくためにはみこころに従う以外に道はないのです。そして感謝なことにそれは可能だと神様は言われる。それを邪魔するのは私たちのうちに生まれつき持っているこのプライドという罪なのです。自分をよく見せたい、よく見てもらいたい、私たちは救いにあずかって以降、自分をよく見てもらいたいとかよく見せたいとは思っていない。私たちのような者を救って下さった神をよく見せたい。このすばらしい神様を人々に見てもらいたい、そうやって生きていくのです。プライドを捨てることです。

### 特徴3：「聖餐式をしていた」 1コリント11：24-25

彼らは使徒たちの教えを堅く守り続けていただけではない、彼らはまさに“コイノニア”、交わりを持っていた。そして彼らは「パンを裂」いていた、つまり聖餐式を行っていたということです。彼らはパンと杯をいただくことによって、イエス様の死を覚えていました。

### ⑧ 再臨を待望する群れだった 1コリント11：26

聖餐式についてパウロは1コリント11章で教えていますが、それを見ると、まさに聖餐式を正しく持っている人たちというのは、まず一つ目にいつも再臨を覚える機会があるということです。聖餐式を持つ時にみんながイエス様の十字架を思うのですが、同時にイエス様は私たちを迎えに来てくれるのだと。1コリント11：26に「あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、」とあります。私たちは地上においてずっと聖餐式を守るのではないのです。イエス様が私たちを迎えに来てくれる時、終わる時が来るのです。ですから聖餐式をする時にイエス様が帰って来られること、我々を迎えに来てくださることを一同がしっかりと覚えたことです。

### ⑨ 伝道する群れだった 1コリント11：26

同時に、聖餐式を行っているということは必ず彼らは伝道に熱心だったはずです。なぜかという、先ほどお読みした1コリント11：26には「あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」とあります。杯を飲みパンを食べることによって我々は霊的になるのではないのです。それを取り、イエス様が私の身代わりとなって十字架で死んでくださったことを思う時に、それを感謝するだけではない。こんなにすばらしい救い主がいてくださる、私たちが罪から救い出してくださる唯一の救い主がおられることを伝える責任を、いや特権を下されたことを我々は覚えて、その働きをなすのです。イエス様の教えを人々に告げ知らせていたのです。

#### ⑩ みずからを吟味する群れだった 1コリント11：27-29

そして10番目に、間違いなく彼らは自分たちを吟味する群れだったということです。なぜかという、聖餐式の目的の一つはそこにあります。1コリント11：28-29に「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。」、だから聖餐式の意義は、私たちがイエス様の十字架を見上げて、そして私はこの救いにあずかった者としてふさわしく生きていくのかどうかを吟味する機会です。自分の信仰の歩みを吟味する機会です。間違いなくこの人たちは聖餐式を行っていたゆえに自分の信仰を吟味しながら歩んでいた。そういう信仰者だと言えます。

#### 特徴4：「祈りをしていた」

彼らの特徴は、使徒たちの教えを堅く守り続けていたし、神に喜ばれる交わりを持ち続けていたし、そして聖餐式を守り続けていた。四つ目に出てきているのは「祈りをしていた。」です。

#### ⑪ 祈る群れであった：コロサイ4：2、ルカ18：1-8

ということは11番目に彼らは祈る群れであったということです。祈りについてのみことばは皆さんよくご存じです。コロサイ4：2「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」や「いつでも祈るべきであ」とルカ18：1に出てきます。だから祈りというのは、あなたにとっても私にとっても非常に大切なものだという事言うまでもない。問題なのは祈りの重要度です。つまりあなたの生活の中でどの位置を占めているかです。もちろん祈りの必要性はみんなわかっているのです。でもどれだけ祈りが私の生活に重要であるとあなたが信じているかなのです。みことばはたえず祈りなさいと言った。なぜかという、我々は絶えず神の助けをもらう必要があるからです。私たちはどんな時でも神の助けなくして神の栄光を現すことはできないのです。神が喜ばれる道を選択することもできない。神が喜ばれることばを発するために、神が喜ばれることを考えるためにも、行うためにも神の助けが要るのです。それほど私たちは弱く愚かな存在なのです。それにアーメンと思わない人がいたらみずからを正しく知ることが必要です。

こんな私たちは神の救いにあずかる資格の全くない存在です。でも神様は与えてくださった。その神が絶えず祈り続けなさいと言われる。それが信仰者として最も大切なことの一つなのです。でも残念ながら祈りというのはそこまで重要視されていないのです。ほかのことが忙しくて、どちらかという祈りの生活が非常におろそかになっている。例えば1日で祈る時間を考えた時に5分かもしれない。もっと短いかもしれない。ひょっとしたらゼロかもしれない。そんな信仰生活を送っていて、どうしてあなたを通して神のみわざがなされることに期待できます？あなたの信仰生活は言い換えれば神ではなくて自分の知恵や力に頼って歩んでいるのです。神はそんなことを私たちに期待しておられない。つまり祈っている人というのは、自分の弱さを認識し、同時に神の御力を知っている人です。自分の弱さを知っているから神に頼ろうとし、神に頼るのは神の力がどれほど偉大であるかを知っているからです。

アメリカの牧師であり弁護士でもあった、19世紀から20世紀の初頭に働きをなさっていたE・M・バウンズという先生がいます。この先生は11冊の本を書かれているのですが、その中の8冊が祈りがテーマです。何冊か日本語にもなっています。その方が「教会の最大の必要は、裕福な人でも知的な人でもない。祈りの人である」と言っています。また「祈りを第2番目に位置づけることは人生において神を2番目にすることだ」とも。私たちの信仰生活において祈りがどの位置を占めているかです。祈りはなくてはならないこと、最も重要なのです。神に喜ばれる歩みをするためには祈り続けることが要るのです。皆さんはそれを何度もお聞きになった。でも実生活にそれが生きていないとすれば、皆さん自身が祈りはそんなに重要ではないと思っておられることを証ししているのです。

イギリスの19世紀の最も優れた説教家と言われているチャールズ・スポルジョンも「祈禱会は教会を躍動させる機会である。」と言っています。祈りによって教会が躍動し始めるのです。教会が活気づいてくるのです。教会が神の前に変えられていくのです。ですから多くの人たちがその教会の霊的レベルを知りたければ祈禱会に行きなさいと言います。それがその教会の霊的レベルだからと。神の前に出られるというのは私たちに与えられた特権です。この全能なる神の前に取り成しができるというのは私たちの特権なのです。問題なのは神の助けを、その力を信じて神の前に立っているかどうかです。

## 結論：

初代教会には、こういう四つの特徴がありました。そしてどんなことが彼らに起こったのか、その後を見ていくと、「そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し」ていたと、使徒2：46－47aです。つまり彼らはこういうことをただしなればいけないからしていたのではないのです。彼らは心からこのように歩んでいたのです。彼らは神を喜びながらこのようなことをしていたのです。そして神が彼らを喜んでおられることを神ご自身が証明された。まずすべての民に彼らは好意を持たれた。すばらしい証しがなされたのです。そして「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」と。この初代教会を神は用いたのです。なぜなら彼らは神に喜ばれる歩みをしていたからです。このような個人であり群れだったからです。

果たして神様は同じように私たちのことをごらんになられるのでしょうか？あなたのことを同じように喜びを持ってごらんになるのか、私たちの群れをどんなふうにごらんになるのか——。私たちはもう一回原点に戻らなければいけない。そこに立ち返ってこなければいけない。私の信仰がどうなのか——。そこに立ち返らなければ、間違いなくあなたはこれからの信仰生活をむだにしまいます。立ち返ることです。神は赦してくださる。神は私たちを変えてくださり、こんな私たちを用いてくださるのです。そんなすばらしい生活を私たちは地上においても送ることができるのです。でもそのためには、もし神が何かをあなたに示してくださっているのなら、きょう立ち返ることです。そして残りの人生をしっかりとそのように生きていくことです。信仰者の皆さん、私たちに神様が問われていることは、この地上で何をするかではない、神様のみことばに従って生きているかどうかです。それが私たちに一番問われていることです。そこにフォーカスを当てなければいけない。そうして我々は生きていくのです。もう一度この原点に戻って、そして願わくばひとりひとりが自分の信仰を吟味して、神に喜ばれる歩みをしていきたいという決心を持ってきょうから歩んでください。